

Title	藤林君と電子計算機
Sub Title	Late Prof. Keizo Fujibayashi and I. B. M.
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.6/7 (1963. 7) ,p.475(7)- 476(8)
JaLC DOI	10.14991/001.19630701-0007
Abstract	
Notes	藤林敬三博士追悼特集 追悼の辞
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630701-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はあるけれども、申訳ない気がするものの一つである。

しかしながら、学問に対する博士の誠実さ、情熱は、なお経済学部部の伝統に、また産業研究所の活動に、脈々として流れている。それをうけつぎ、博士の学問的遺産を一層発展せしめることこそ、博士の靈に応える最大の、かつ最善の道であると思うのである。

藤林君と電子計算機

寺尾琢磨

あれからもう七ヵ月。彼はいま鎌倉の小高い丘の古刹杉本寺の一隅に眠っている。数日前わたしは彼の墓を訪れて、電子計算機の導入されたことを報告してきた。「おれたちもいつ迄も塾にいるわけにはゆかないのだから、いる間に何か残しておきたいな」と彼が言い出したのが、電子計算機導入の発端となったのであって、それは一昨年の夏のころのことであった。昨年五月下旬病に倒れてから逝去までの四ヵ月の間、彼が最も気にした問題の一つはこれであった。生前にその実現を見なかつたことは残念至極というほかないが、いまこれを墓前に報告することができて、本人もさぞ満足してくれたことであろう。

わたしが電子計算機を欲しがるなら、統計学に携わる一員として当然のことだが、そうでない藤林君が同じ願望をもったについては、多少の説明を要しよう。彼は塾に残ったころはかなり抽象的理論的だったが、それは当時の塾のいわば学風だったといつてよからう。昭和四年彼は労働心理学、わたしは統計学研究のため留学を命ぜられ、二人仲よくドイツへ出かけた。彼は初めはワントの心理学などに没頭していたが、次第に労働問題・社会問題に興味を抱きはじめた。ヘルクナー教授あたりの影響だったと思う。最初の目的だった労働心理学はいつしか労働経済学に変わったわけで、彼が後に中労委に関係したり、産業研究所を設けるなど、きわめて現実的な活動に終始したことは御存知のとおりである。

産業研究所では、研究所自体のプロジェクトとして、また各方面からの委託を受けて、多くの調査研究をしているが、その整理や分析に複雑な計算を必要とすることは勿論である。いままではその都度これを外部の計算センターに依頼したが、

それは余りにも面倒だし、また費用の点でも閉口した。自分の電子計算機をもちたいと思うのは当然だが、一億円以上するものをそう簡単に望めないこともまた当然である。藤林君から相談を受けたとき、わたしとしても成算は全くなかった。しかし彼の熱意は遂に「IBM」社、文部省、そして特に畏友萩原吉太郎君を動かし、また不可能視されていた通産省の許可をも獲得して、このたび導入を見るに至ったのである。

そうしたわけで導入の動機は産業研究所の必要からであったが、われわれは間もなくその目的を拡大し、全塾的利用を考へるに至った。その内容は二つある。一つはかような装置を必要とする塾内のすべての調査研究に解放することで、従って所有権者は産業研究所ではなくて、塾そのものである。近く設けられるその運営委員会も恐らく各学部から選抜されることと思う。この構想も結局は藤林君から出たのであって、彼の気前の良さを窺わしめるに足ろう。第二の目的はこれを教育の具たらしめることである。技術革新の進展と共にいわゆる人造りの標語の下に教育の在り方が問題となってきた。要はいかにして新しい人材を養成するかということで、具体的には数かぎりない問題があるが、わたしはその一つとして教育と機械との結びつきの強化を挙げうると思う。第一は教育にもっと機械を利用することで（例えばテープレコーダーによる語学教育）、第二は機械に対する知識の涵養である。いま電子計算機は社会のあらゆる場所で活動している。文科系の卒業生でもこれにぶつかるケースは益々多くなるであろう。わたし達はたとえ数は少なくても、かような能力を身につけた卒業生を送り出したいと考えていた。その可能性は今回実現したわけで、大げさに言えば、これで塾の教育は新しい時代を迎えることになったのである。

藤林君の多彩な業績はいずれも生前立派な実を結んだ。しかし、こと電子計算機に関する限り、すべては死後にもちこされた。彼が期待した通りの効果が生まれるかどうかは、一にかかってわれわれ残された者の努力いかんである。わたしは、誇りをもってその成果を彼の墓前に報告できる日も早くらんことを祈っている。

藤林敬三教授を偲ぶ

川 田 寿

この三月第三日曜日の夜のことである。イリノイ州シャンペーンの静かな住宅で、一昨年春ツツジの咲く頃の藤林教授の健康な姿に接することができた。

その日、カーン教授に休養のドライブをして貰い、奥さんや二人の坊や、二瓶恭光君と一緒に地方小都市や広々とした農地をみた後で、楽しい夕食を御馳走になってから、かねて約束の八ミリ映画を見ることになった。

一昨年四月の三池労組のけっ起大会、メーデーその他のシーンが次々と写されていったとき、突然カーン教授が「フジバヤシ！ フジバヤシ！」と叫んだ。ツツジが満開の庭に立たれて笑顔で話している藤林教授と先生の奥さんの姿である。カーン夫妻も、姉弟とも先生の教えをうけた二瓶君も、ともに先生の人格に心酔しており、先生の死を未だに信じられないような気持ちでいるので、映画ののち静かに先生の最期について語った。また話しは先生をめぐっているいろいろと尽きなかった。

その中でも、一昨年春のある日、カーン夫妻と私たちが先生のお宅に招かれたときのことや、三池炭鉱労働者についての調査その他について産研で話し合ったことなど、シャープなカーン教授の印象が鮮やかに語られた。三池調査を計画したとき、藤林先生も他の多くの専門家と同じように不可能説をとっておられた。大争議の余燼がまだくすぶっているとき、アメリカ人の教授が、第一・第二労組に分かれて激突していた三池労働者に個別的に面接して、聴取り調査を行なうというのだから、常識的には不可能と判断するのが当然であった。